# 『略論安楽浄土義』の思想背景

## ――仏智疑惑論について――

高田文英

### はじめに

『略論安楽浄土義』（以下『略論』）について論じる場合、本書が曇鸞（四七六～五四二年）のものであるか否かという撰述の問題は、避けて通ることのできない課題と言えよう。今、その研究史の詳細は略するが、二本の敦煌写本の発見により、『讃阿弥陀仏偈』と『略論』に関して、同一人による一連の著作である可能性が書誌学的な面から補強され、これを一つの契機として、大方の見方は曇鸞撰述に傾いているように思われる。しかし一方で、これに疑問を呈する声もあり、なおはっきりしないと言わねばならないのが現状であろう。

ただ、本書を少なくとも、道綽（五六二～六四五年）の『安楽集』成立以前の文献と位置づけることは、現在、研究者間の共通認識として異論ないように思われる。『安楽集』に『略論』の文が多く引かれているからである(1)（ただし著者名・書名は示されておらず、道綽が本書を曇鸞の撰述と見ていたかについては明らかでない）。

そして今後、この撰述の問題を決着させていくためには、書誌学的な面(2)と併せ、思想的な面(3)からも様々な研究の積み重ねが必要であろう。とくに『往生論註』（以下『論註』）との関係を問う研究は、その軸となるものと思われ

る。

本稿はこうした課題を念頭に置きながら、『略論』に展開される仏智疑惑論の思想背景について、出典調査を通し検証するものである。『略論』は九つの問答からなるが、仏智疑惑論は分量にして本書の約半分を占める第五問答から第八問答において論じられる（第六・第七・第八問答は第五問答中に展開される小問答である）。

なかでも仏智疑惑論を取り上げる理由は、ここに展開される議論は、浄土教の文献としてはある種特異なものが感じられ、『略論』著者の思想背景を窺う上にとくに重要な箇所と思われるからである。詳細は後に譲るが、思想的には般若空の思想、文献としては主に『大智度論』がその背景にあることが知られる。『論註』との比較にも注意を払いつつ検討を試みたい。(4)

## 一、第五問答冒頭の段

### （1）一切種智・一切智

第五問答冒頭では、

不了仏智者、謂不レ能二信二了仏一切種智一。（真聖全一、三七〇頁）

と、『無量寿経』の「仏智」が「一切種智」と言い換えられている。

この「一切種智」とは、声聞・辟支仏の智慧である一切智、菩薩の智慧である道種智とともに三智と呼ばれるもので、名畑氏はこの三智について『大品般若経』巻一（大正八、三一頁）、同巻二一（大正八、三七三頁）、『大智度論』巻二七（大正二五、二五八頁）、同巻八四（大正二五・六四九頁）等参照せよと指示されている。(5)

『略論』では、「一切種智」の語が三回（真聖全一、三七〇頁、三七四頁）、「一切智」の語が一回（真聖全一、三七

四頁）出るが、「一切智」についても声聞・辟支仏の智慧ではなく、仏の智慧を表す語として用いられている。こうした「一切智」の用例は、諸経典に広く見られるが、『大智度論』巻二七には、声聞・辟支仏の一切智は但だ名字のみで実がなく、実の一切智は仏のみであるから「或時名レ佛爲二一切智人一或時名爲二一切種智人一」（大正二五、二五九頁中）と、仏智を一切智と呼ぶことがあると説いている。『略論』の一切智の用例は、直接にはこの『大智度論』巻二七の説示に基づくものかと推察される。

また、『論註』には「一切種智」の語が三回（真聖全一、三〇二頁、三三〇頁、三三七頁）、そして「一切智慧」の語が一回（真聖全一、三一三頁）出るが、「一切智」と同語であろう「一切智慧」の語がやはり仏智を表しており、「一切種智」「一切智（一切智慧）」に関する『論註』と『略論』の用例は同じと見られる。

## 二、不思議智の段

### （2）七つの比喩

十念相続をもって一生の悪を滅せしめる仏の智力の不可思議なることの喩えとして、次の七つの比喩が挙げられている（真聖全一、三七一頁）。なお、比喩の名称は誓鎧『略論安楽浄土義讃慧録』（下巻、十九丁右～二三丁右）[6]による。

①聚薪焚盡の喩、②辟者寄載の喩（辟者寄船の喩）、③貧窮瑞物の喩、④劣夫従王の喩（劣夫乗空の喩）、⑤童子断索の喩、⑥鴆鳥犀角の喩、⑦黄鵠子安の喩（鵠呼子安の喩）。

このうち、④⑥⑦の三つは『論註』にも見られる。また②は『論註』冒頭に挙げる「易行品」の文による喩えとされる（大含『講義』、真宗全書十一、三七八頁）。今は、『論註』に見られない①③⑤について述べる。

①聚薪焚盡の喩は、大含『講義』（真宗全書十一、三七六頁）によると曇無讖訳『大方等大集経』巻六によるとあるが、巻六には該当の文が見あたらず、巻九にそれと思われる文が見つかる。

火勢雖レ小畏乾レ薪不。不也世尊。菩薩摩訶薩初發二無上菩提心一已。得二智慧火一亦復如是。

（大正一三、五四頁中）

『大方等大集経』巻九では、菩提心を発すことの功徳の大きさを説く喩えとして用いられている。

③貧頁瑞物の喩は、大含『講義』には「雑宝蔵経ニ出タルタトヘト云コトナリ」（真宗全書十一、三七六頁）とある。(7) 名畑氏は出典につき異説ありとしつつ、『大智度論』巻三〇の「如下人獻二王少物一而得二大報一」（大正二五、二八一頁下）の文を指示されているが、この喩えの出典として相応しいと思われる（名畑氏前掲書、一三一頁）。この『大智度論』巻三〇では、菩薩道、声聞道等の仏道を修することの利益を表す喩えである。

⑤童子断索の喩は、大含『講義』には「華厳経ニアルト云コトナレドモ校ヘヌナリ」（真宗全書十一、三七七頁）とある。出典不明である。

（3）五種不思議説

十念念仏により百年の悪を滅して浄土に往生し正定聚に入ることが、五種不思議説のなかの仏法不思議をもって表わされている。『略論』当該の文は以下の通り。

又五不思誼中佛法最不可思誼、而以二百年之惡一爲レ重、疑二十念念佛一爲レ輕、不レ得下往二生安樂一入中正定聚上者、是事不レ然。

（真聖全一、三七一頁）

この五種不思議説は『大智度論』に見え、『略論』もこれに拠っているものと思われる。名畑氏は出典として

『大智度論』巻三〇の用例を指示されている（名畑氏前掲書、一三二頁）。巻三〇では、菩薩が一念中に十方諸仏世界に至り得ることを説く上で「於二五不可思議中一。仏力最不可思議。」（大正二五、二八三頁下）とある。他にも、巻二六では、仏が常に入定しつつ、しかも不可思議の智慧あるがゆえによく説法することを説く上に「五種不可思議法中。仏法最不可思議。」（大正二五、二四八頁下）とあり、巻九〇では、仏の寿命の随意なることを説く上で「仏法於二五不可思議中一。是第一不可思議」（大正二五、六九八頁中）とある。また巻九三では阿羅漢の作仏を説く上に「仏法於二五不可思議中一。最第一。」（大正二五、七一四頁上）とある。

次に『論註』における五種不思議説の用例を見れば、三例ある。このうち一つ目と三つ目は仏法不思議を言うもので、二つ目は五種不思議説のなかの業力不思議を言うものである。

一つ目は『論註』巻上に、

> 然五不思議中仏法最不可思議。佛能使下声聞復生中無上道心上、真不可思議之至也。（真聖全一、二九八頁）

とあり、浄土における声聞の発心、作仏を説く上に用いられる。これは『大智度論』巻九三の用例とほぼ同趣旨と言える。

次に、『論註』巻下に、

> 佛土不可思議有二二種力一。一者業力、謂法蔵菩薩出世善根、大願業力所レ成。二者正覚阿弥陀法王善住持力所レ摂。（真聖全一、三一七頁）

とあり、浄土が法蔵菩薩の大願業力の所成であり、阿弥陀法王の善住持力の所摂であることを言うものである。『略論』でも『浄土論』をうけて「十二者阿弥陀佛无上法王善力住持」（真聖全一、三六八頁）とあるが、業力不思議説自体は見られない。

三つ目は、『論註』巻下に、

五種不思議中仏法最不可思議。若言下菩薩必従二一地一至二一地一无中超越之理上、未二敢詳一也。

（真聖全一、三三三頁）

とあり、初地已上七地已還の未証浄心の菩薩が、浄土で速やかに八地已上の平等法身を得ることを説く上に用いられる。

このように種々説かれるが、『論註』の用例はいずれも五種不思議説を浄土の不思議を表すものとして用いていると整理できるが(8)、一方『略論』では十念念仏による往生の不思議を表すものとして用いられている点に相違が見られる。

## 三、不可称智の段

（4）「夫一切名字～従二記方一生。」の文

当該の『略論』の文は「不可称智」の語より導き出される、第二の疑惑中の文である（傍線箇所）。

二者疑、佛智於レ人不レ爲二玄絶一。何以故、夫一切名字従二相待一生、覺智従二不覺一生、如レ迷レ方従二記方一生。

（真聖全一、三七一頁、傍線は筆者、以下同様）

仏智といえど、それは不覚によるものであるから、一切の名字が相待から生じるのと同じく、やはり相待的なものに過ぎない。それなのに、仏智のみを玄絶たるものとすることは道理に合わない、と主張するのがこの疑惑である。

この文の出典の候補としては、まず『大智度論』巻一二の次の文との関連を検討すべきであろう。

相待者如二長短彼此等一。實無二長短一亦無二彼此一。以二相待一故有レ名。長因レ短有短亦因レ長。彼亦因レ此此亦因レ彼。

若在二物東一則以爲レ西。在レ西則以爲レ東。一物未レ異而有二東西之別一。此皆有レ名而無レ實也。如レ是等名爲二相待有一。（大正二五、一四七頁下）

この『大智度論』巻一二の文は、「相待有」「假名有」「法有」のうち「相待有」について解説するもので、傍線箇所「以二相待一故有レ名」は『略論』の「夫一切名字從二相待一生」と対応し、相待の喩えとして方角を用いている点も、やはり『略論』との対応が見られる。(9)

ただし『大智度論』には、『略論』の「覺智從二不覺一生」の部分に対応する文が見あたらない。この部分は、仏智は玄絶ならずとするこの第二の疑惑にとって、主張の根拠となる重要な部分であり、教理的にも特徴的な言説と言える。それゆえ、『略論』筆者が仮に創作した言葉ではなく、先行する何らかの説を前提としていると考えるのが自然なように思われ、前掲の『大智度論』巻一二の文を直ちに出典とすることは躊躇される。

この文について、大含『講義』（真宗全書十一、三八一～三八二頁）は、真諦訳『大乗起信論』ならびに法蔵『大乗起信論義記』に基づいて解釈を施している。また、誓鎧『讃慧録』も「如下旧注引二起信論一示上」（下巻、十六丁左）と、『大乗起信論』を引く旧注の説を紹介している。『大乗起信論』の文とは以下のとおり。

一者覺義。二者不覺義。所レ言覺義者。謂心體離レ念。離念相者等二虛空界一無レ所レ不レ遍。法界一相即是如來平等法身。依二此法身一説名二本覺一。何以故。本覺義者。對二始覺義一説。以二始覺者即同二本覺一。始覺義者。依二本覺一故而有二不覺一。依二不覺一故説レ有二始覺一。（大正三二、五七六頁中）

この傍線部「依二不覺一故説レ有二始覺一」の部分が、『略論』の「覺智從二不覺一生」と同趣意と見られる。また、この『大乗起信論』の文の少し後に、

所レ言不覺義者。謂不二如レ實知二眞如法一一故。不覺心起而有二其念一。念無二自相一不レ離二本覺一。猶如下迷人依レ方故

迷。（大正三二、五七七頁上）

と、不覚の義に方角の喩えが用いられている点も、『略論』の文と共通する。

しかしながら、真諦三蔵が中国に到着したのは五四六年、『大乗起信論』を翻訳したのは五五〇年であったと言われる。[10] 一方、曇鸞の没年は五四二年とされるから、『大乗起信論』からの影響を論ずることは、『略論』の曇鸞撰述をほぼ否定することになる。それゆえ、慎重な吟味が必要である。[11]

なお、『論註』にはこの文を含め第二の疑惑との関連が指摘される文は見あたらない。

（5）「縁レ之者心行滅、指レ之者言語断」の文

この箇所の解説に、誓鎧『讃慧録』（下巻、二九丁左）は『大智度論』巻一五の次の文を指示している。

佛法中一切言語道過。心行處滅常不生不滅。如二涅槃相一。（大正二五、一七〇頁中）

また、この「言語道過。心行處滅」の語は、『論註』巻下にも見られる。

正遍知者、知二一切諸法實不壞相、不増不減一。云何不壞、心行處滅言語道過。諸法如二涅槃相不動一。故名二正遍知一。（真聖全一、三一三頁）

まず『大智度論』巻一五の文であるが、この文は諸法実相を観ずるとは如何なることであるかとの問いに対する答えの文中にあり、「言語道過。心行處滅」の語は、諸法実相を形容する表現である。『論註』の文は、阿弥陀仏の「正遍知」を説明した文であり、「心行處滅言語道過」の語は、正遍知によって知られるところの一切諸法のありようを表しているから、『大智度論』巻一五の用例と同じと言える。

これに対して、『略論』の用例は少し異なっている。直前に「仏智離二此四句一」とあるように、ここで直接論じ

られるのは諸法のありようではなく仏智である。そして「縁レ之者」とあるように、「心行滅」「言語断」の語は、仏智そのものを形容する語ではなく、仏智を縁ずる者の上に発る事態を表現する語として用いられている。

（6）「釈論言…」の文

『略論』の文は以下の通り。なお、「釈論」とは『大智度論』のことである。

『釋論』言。「若人見二般若一、是則爲レ被レ縛。若不レ見二般若一、是亦爲レ被レ縛。若人見二般若一、是則爲二解説一、若不レ見二般若一、是亦爲二解説一。」此偈中説。不レ離二四句一者爲レ縛、離二四句一者爲レ解。（真聖全一、三七二頁）

出典は『大智度論』巻十八の次の文である。

若不レ見二般若一　是則爲レ被レ縛　若人見二般若一　是亦名レ被レ縛　若人見二般若一　是則得二解脱一　若不レ見二般若一　是亦得二解脱一（大正二五、一九〇頁下）

『略論』の引用文と『大智度論』の原文はほぼ同文である。『大智度論』では諸法実相について論じた最後に「如下讃二般若波羅蜜一偈説上」（大正二五、一九〇頁中）と、今の文を含む偈文が引かれる。『略論』では、不可称智を論ずる上で、仏智が四句分別を離れていることの例証として、この文を引いている。この『略論』の引意は『大智度論』の原意とほぼ同じと見てよいであろう。なお『論註』には該当する文は見られない。

## 四、大乗広智の段

（7）第三の疑惑

第三の疑惑は、四つの疑惑のなかでももっとも紙数を割いて論じられている箇所である。

三者疑、佛不レ能二實度一二一切衆生一、何以故、過去世有二无量阿僧祇恒沙諸佛一、現在十方世界亦有二无量无邊阿僧祇恒沙諸佛一。若使三佛實能度二一切衆生一者、則應三久無二復三界一、第二佛則不レ應下復爲二衆生一發二菩提心一具脩二淨土一攝中受衆生上。而實有二第二佛一攝二受衆生一、乃至實有二三世十方无量諸佛一攝二受衆生一。故知、佛實不レ能レ度二一切衆生一。

（真聖全一、三七二頁）

もし実に仏が一切衆生を度することができるならば、三界そのものがなくなり、第二の仏は衆生を摂受することができなくなるはずである。しかし実際には三世十方に無量の仏が有して衆生を摂受しているのであるから、仏は実には一切衆生を度することはできないはずである、との疑惑である。

この疑惑は、『大智度論』巻四の次の文との関連が窺える。

一佛不レ能レ得レ度二一切衆生一。若一佛能度二一切衆生一者。可レ不レ須二餘佛一。但一佛出。如二諸佛法一度二可度衆生一已而滅。如二燭盡火滅一。有爲法無常性空故。以レ是故。現在應三更有二餘佛一。

（大正二五、九三頁中）

この巻四の文は、仏は二仏並出することはないはずであるとの問いに対する答えの一部である。一仏は一切衆生を度することはできない。もし一仏が一切衆生を度し尽せるのであれば、その他の仏は必要なく、ただ一仏のみが世に出ることになるからであると説いている。

同様の説示は、『大智度論』巻二〇にも見られる。(12)

若一佛盡度二一切衆生一。餘佛則無レ所二復度一。是則無二未來佛一爲レ斷二佛種一。有二如レ是等過一。以レ是故一佛不レ度二一切衆生一。

（大正二五、二一〇頁中～下）

『略論』はこうした『大智度論』の教説を、逆に疑惑者の側の内容として採用していることが分かる。ただし『大智度論』の説きぶりは四悉檀を踏まえて多様であるから、『略論』の著者が直ちに『大智度論』の今の説意に

批判的であるかは、別に考えるべき問題である。

（8）有縁無縁の義

「有縁無縁の義」は、第三の疑惑、すなわち仏が一切衆生を度することは不可能ではないかとの疑惑であるが、これに五義をもって答えるなかの第四の義である。

四者佛力雖二能度一二衆生一、要須レ有二因縁一、若衆生與二前佛一无二因縁一、復須二後佛一、如レ是无縁衆生動逕二百千万佛一、不レ聞不レ見、非二佛力劣一也。譬如下日月周二四天下一破二諸闇冥一而盲者不レ見、非二日不レ明也一、雷聲震レ耳而聾者不レ聞、非二聲不一レ勵也。覺二諸縁理一号レ之曰レ佛、若情強違レ縁非二正覺一也。是故衆生无量佛亦無量、徴下佛莫レ問二有縁无縁一何不二盡度一レ之一切衆生一者、非二理言一也。（真聖全一、三七三頁）

このうち傍線箇所は、大含『講義』（真宗全書一一、三九二頁）が指摘するように『大智度論』巻九の次の文であろう。喩えの表す内容がよく一致している。

問曰。若有二十方無量諸佛及諸菩薩一、今此衆生多墮二三惡道中一。何以不レ來。答曰。衆生罪重故。諸佛菩薩雖レ來不レ見。又法身佛常放二光明一。常説法。而以レ罪故不レ見不レ聞。譬如二日出盲者不レ見。雷霆振レ地聾者不レ聞。如レ是法身常放二光明一常説法。衆生有二無量劫罪垢厚重一不レ見不レ聞。（大正二五、一二六頁中）

『論註』巻上でも、これに対応する文が見られるが(13)、喩えが『論註』は盲者・頑石の喩え、『略論』は盲者・聾者の喩えである点、また『論註』では阿弥陀仏の光明に限定した問いであるのに対し、『略論』は仏力一般に対する疑難である点に相違がある。そして文意自体も多少異なり、『略論』では、度・不度は、それぞれの衆生とそれぞれの仏の「因縁」の有無によるとの主張となっている。この「因縁」の有無によるとの言い方は、今挙げた『大

智度論』巻九の問答中には見られない。誓鎧『讃慧録』（下巻、三四丁左）が指摘する『大智度論』巻八の文などによるものと思われる。

問曰。若二釋迦文尼佛一以二大神力一廣度二十方一。復何須二餘佛一。答曰。衆生無量。不二一時熟一故。又衆生因縁各各不レ同。如二聲聞法中説一。舎利弗因縁弟子。除二舎利弗一。諸佛尚不レ能レ度。何況餘人。（大正二五、一一八頁中）

（9）度無所度の義

度無所度の義は、先述の有縁無縁の義に続く五義のなかの第五の義である。『略論』当該の文は次の通り。

五者衆生若盡世間即堕二有邊一、以二是義一故則有二无量佛一度二一切衆生一。（真聖全一、三七三頁）

もし衆生が度し尽くされるならば世間は有辺に堕すことになる（しかし、実際には衆生が度し尽くされることはなく、世間は有辺ではない）。ここから、無量の仏が各々一切衆生を度し給う義が成ぜられる、という。

誓鎧『讃慧録』（下巻、三二丁右）では、次の『大智度論』巻九の文が同意であると指摘している。

雖下釋迦文尼佛有二無量神力一能變化作佛在二十方一説法放二光明一度中衆生上。亦不レ能レ盡レ度二一切衆生一。堕二有邊一故。則無二未來世佛一故。然衆生不レ盡。以レ是故應二更有一餘佛一（大正二五、一二五頁上）

大含『講義』（真宗全書一一、三九四頁）では、『大智度論』巻九の次の文を略して引いたものとしている。

問曰。如二佛所説一切世界無量無邊。云何言二其世界最在レ邊。最在レ邊者是堕二有邊相一。若世界有邊衆生應レ盡。何以故。無量諸佛一一佛度二無量阿僧祇衆生一。令レ入二無餘涅槃一。更無二新衆生一。故者應レ盡。答曰。佛經雖レ言二世界無量一。此方便説非二是實教一。如二實無一神方便故説言レ有レ神。此十四難。世界有邊無邊俱爲二邪見一。若無邊佛不レ應レ有二一切智一。何以故。智慧普知無二物不レ盡。是名二一切智一。若世界無邊是有レ所レ不レ盡。若有邊如二先説一

咎。此二俱邪見。何以故。依二無邊一以破二有邊一故。（中略）佛智無量故應レ知。譬如二函大故蓋亦大一。（大正二五、一二四頁上）

また、『論註』巻上の「若言二一佛主二領三千大千世界一。是聲聞論中説。若言二諸佛遍領二十方无量无邊世界一、是大乘論中説。」（真聖全一、二八三頁）の文との関連が窺われる。

（10）第六問答

第六問答は、直前の文である五義の第五の義をうけた問答となっている。前に世間の有辺を遮して仏が一切衆生を度す義を成じたから、次は世間の無辺を遮すのである。

問曰。若衆生不レ可レ盡世間復堕二无邊一、无邊故佛則不レ能二實度一切衆生一。答曰。世間非二有邊一非二无邊一、亦絶二四句一。佛令二衆生離二此四句一、名レ之爲レ度、其實非レ度非二不度一、非レ盡非二不盡一。譬如下夢渡二大海一値二濤波諸難一、其人畏怖叫聲徹レ外、有レ人喚覺坦然无上レ憂、但爲レ渡夢、不レ爲レ渡河。（真聖全一、三七三頁）

衆生を度すことは、実には度・不度の両義を離れ四句を絶しているという。

これは『論註』巻下の文との関連が見られる。

二者度无所度義、菩薩觀二衆生畢竟无一所有一、雖レ度二无量衆生一、而實无下一衆生得二滅度一者上、示二度衆生一如二似遊戯一。（真聖全一、三四五頁）

この文が浄土の菩薩の還相について説くものであるのに対し、『略論』では仏について説くものである。『往生論註出典の研究』（六五〇頁）では、この『論註』巻下の文の出典として、『大智度論』巻二〇に、

復次諸法實相第一義中則無二衆生一。亦無レ度。但以二世俗法一故説言レ有レ度。汝於二世俗中一。求二第一義一。是事不可

得。（大正二五、二一〇頁下）

とある文などを挙げるが、いまの『略論』の文の出典とも見ることができよう。（7）に挙げた『大智度論』巻九の文との関連も窺われる。

また、夢に大海を渡る喩えについては、誓鎧『讃慧録』（下巻、三七丁右）に、菩提流支訳『入楞伽経』巻九「如二人睡夢度二大海水一」（大正一六、五五五頁中）の文、義浄訳『金光明最勝王経』巻二「譬如下有レ人於二睡中一見二大河一水漂泛其身運レ手動レ足截レ流而渡得レ至二彼岸一。由下彼身心不中懈退一故従レ夢覺已不レ見レ有レ水」（大正一六、四一〇頁上～中）の文が指摘されている。ただし『金光明最勝王経』については唐の七〇三年の訳出とされるから、出典と考えることは難しい。

なお、この大海を渡る喩えに「不レ爲レ渡河」とあることについて、大含『講義』（真宗全書一一、三九五頁～三九六頁）には、海のことを川と呼ぶ『大智度論』巻五五「衆川萬流大海爲レ上」（大正二五、四四九頁中）、巻八二「譬如下大海於二萬川中一最大上」の用例に依るものと指摘されている。(14)

『論註』にはこの夢に大海を渡る喩えは見られない。

（11）『諸法無行経』の引文

当該の文は、第七問答のなかにある文である。

復次『无行經』亦言。「佛不レ得二佛道一、亦不レ度二衆生一、凡夫強分二別作一レ佛度二衆生一。」（真聖全一、三七三頁）

これは『諸法無行経』にある偈文（大正一五、七六〇頁中）からの引用である。『諸法無行経』は鳩摩羅什の訳出であるが、『論註』には引用が見られない。

（12）對治悉檀・第一義悉檀

直前に引用する『諸法無行経』の文について、四悉檀のなかの対治悉檀と第一義悉檀をもって次のように解釈している。

言レ度二衆生一是對治悉檀、言レ不レ度二衆生一是第一義悉檀。二言各有二所以一不二相違背一。（真聖全一、三七三頁）

四悉檀については、大含『講義』（真宗全書一一、三九七頁）、誓鎧『讃慧録』（下巻、三八丁右）がともに指摘するように、『大智度論』巻一（大正二五、五九頁中～六一頁中）に詳述されているのに基づくものであろう。

『論註』には、四悉檀に言及する箇所は見られない。

## 五、無等無倫最上勝智の段

（13）第四の疑惑

第四の疑惑は、もし仏が遍く諸法を知るならば、諸法は辺際があることになり、有辺に堕すことになる。ゆえに仏が一切種智を得ることはできない、との疑惑である。

四者疑、佛不レ得二一切種智一、何以故、若遍知二諸法一堕二有邊一故、若不レ能二遍知一則非二一切種智一故。（真聖全一、三七四頁）

この疑惑は、『大智度論』巻二に見える次の問いとほとんど同意である。

問曰。所知處無量故。無二一切智人一。諸法無量無邊。多人和合尚不レ能レ知。何況一人。以レ是故無二一切智人一。（大正二五、七四頁中）

（14）「声聞辟支仏…」の文

『略論』の当該の文は次の通り。

> 聲聞辟支佛欲レ有レ所レ知入定方知、出定不レ知、又知亦有レ限。佛得二如實三昧一常在二深定一而遍照二万法一與二无二、深淺非レ倫、故言二无倫一。（真聖全一、三七四頁）

声聞・辟支仏は、諸法を知ろうとすれば、定に入って始めて知ることができ、定から出れば知ることはできない。また、定に入ってもその知には限度がある。これに対し、仏は如実三昧を得て、常に深い定にあって万法の二と無二とを照知することができるという。

この文について誓鎧『讃慧録』（下巻、三九丁左）は、『成実論』巻一の文を挙げ、また僧肇『注維摩詰経』巻三、『大智度論』巻二六を見よと指示している。

鳩摩羅什訳『成実論』巻一の文は次の通り。

> 如來定常深修習。如二人自字恒憶不レ忘。佛入二禪定一不レ加二心力一。又譬如下人自於二住處一乃自語言。安隱無レ難。佛處二定中一亦復如レ是。故言二如來常在二三昧一。（大正三二、二三九頁中）

僧肇『注維摩詰経』巻三の文は次の通り。

> 時維摩詰來謂レ我言唯富樓那先當下入レ定觀二此人心一然後説レ法。肇曰。大乘自二法身一以上得二無礙真心一心智寂然未二嘗不レ定。以二心常定一故能萬事普照。不下假二推求一然後知上也。小乘心有二限礙一。又不レ能二常定一。凡所二觀察一在レ定則見出レ定不レ見。（大正三八、三五二頁下～三五三頁上）

『大智度論』巻二六の文とは、十八不共法の五番目「無不定心」を釈する一段のことであろう（「無不定心者…」大正二五、二四八頁上～下）。長文のため略する。

これらから『略論』の典拠を措定すれば、仏と声聞・辟支仏との比較で論ぜられる『大智度論』巻二六、もしくは大乗と小乗の比較で論ぜられる『注維摩詰経』巻三が適当と思われる。なお、『論註』には該当する文は見られない。

(15) 報生三昧

『略論』の当該の文は次の通り。

八地已上菩薩雖下得二報生三昧一用无中出入上、而習氣勲三昧不二極明淨一、形二待佛智一猶爲二有上一。（真聖全一、三七四頁）

この報生三昧の語について、誓鎧『讃慧録』（下巻、四〇丁右）には、鳩摩羅什訳『大品般若経』第一九（大正八、二五九頁中）にこの語が見えること、『大智度論』巻一五に「如二人見レ色不レ用二心力一」（大正二五、四一八頁中）等と解説されていることを指摘している。

また、この報生三昧の語は、『論註』巻下にも見られる。

此菩薩得二報生三昧一、以二三昧神力一、能一處、一念一時遍二十方世界一種種供二養一切諸佛及諸佛大會衆海一、能於下無量世界无二仏法僧一処種種示現種種教二化度一脱一切衆生一常作二佛事一初无二往來想供養想度脱想一。是故此身名爲二平等法身一、此法名爲二寂滅平等法一也。（真聖全一、三三二頁）

報生三昧が、八地以上の菩薩の得る三昧である点は『論註』『略論』ともに共通している。しかし『論註』における報生三昧は、菩薩の往生後の得益として、その利他力の自在性が強調される文脈で用いられるのに対し、『略論』においては、仏智の絶対性の比較対象として、むしろその三昧力の有限性の側が説かれている点に相違が見ら

れる。

（16）函・蓋の喩え

『略論』の当該の文は、前の（14）に続く文である。

佛智斷具足如レ法而照、法无量故照亦无量、譬如二函大盖亦大一。　（真聖全一、三七四頁）

この函・蓋の喩えは、もとは『大方便仏報恩経』巻五（訳者不明、二二〇年頃）に見られる。

函大蓋亦大。法大法相無邊。佛以二無邊智一知二説無邊法一。二乗智有邊故不レ稱二法相一。　（大正三、一五五頁上）

誓鎧の『讃慧録』（下巻、四〇丁左～四一丁右）は、この喩えについて『大智度論』巻二にある次の文を指摘している。この文は、（12）に挙げた『大智度論』巻二の問いに対する答えである。

如二諸法無量一智慧亦無量無數無邊。如二函大蓋亦大。函小蓋亦小一。　（大正二五、七四頁中～下）

また『大智度論』巻九（大正二五、一二四頁上）、巻二八（二六五頁下～二六六頁上）にも同じ喩えが見られる。

『論註』には函と蓋の喩えが一箇所見られる。

相應者譬如二函蓋相稱一也。　（真聖全一、二八五頁）

しかし『略論』とは説意が異なり、同一の出典によるものではない。『論註』の文は『大智度論』巻三六（大正二五、三二七頁上）に基づくものである。

## 小結

以上、『略論』の仏智疑惑論について、その思想背景となる出典を検証してきた。なお不十分な点もあろうが、今回の考察を踏まえての所見を述べて、一応の結びとしたい。

一、『略論』の仏智疑惑論の思想背景として、鳩摩羅什訳『大智度論』の影響が極めて大きいことが確認されるが、それ以外に、鳩摩羅什訳『大品般若経』『諸法無行経』『成実論』、曇無讖訳『大方等大集経』、菩提流支訳『入楞伽経』、訳者不明『大方便仏報恩経』、僧肇撰『注維摩詰経』が、出典もしくは出典候補として挙げられる（他に『論註』と共通の『荘子』『列異伝』からの譬喩がある）。大まかな所感であるが、経論疏の引用の傾向としては、『論註』のそれと比べてとくに異質な印象はない。

二、『略論』における『大智度論』の引用について、幡谷氏は一二回を数えられている。出典の数え方は、基準の置き方で分かれるところがあろうが、筆者が数えたところでは、仏智疑惑論のなかだけで一五箇所にわたり『大智度論』からの引用と見られる文が確認された[15]。

逆に、仏智疑惑論以外の箇所（第一、第二、第三、第四、第九問答）では、管見の限り『大智度論』からの引用は二箇所のみである[16]。こうした引用傾向に関する相違は、第一問答から第四問答ならびに末尾の第九問答が、いずれも浄土教内の議論となっているのに対し、仏智疑惑論は、不思議智を論ずる段に十念相続論が見られるものの、それ以外は大乗仏教一般に関する問いに対し般若空思想の上から回答するという、通仏教的な内容を中心としていることと関係するものと思われる。

三、『論註』との比較を論ずれば、『略論』に『大智度論』の影響が顕著なことは、『論註』と共通する傾向と言える。ただし、『略論』における一七回の『大智度論』引用のなか、『論註』に対応箇所を見いだせるのは、筆者の数えたところでは七箇所である。[17] 浩瀚な『大智度論』からの引用が、このように重なることは、両書の緊密な関係を物語るものであるが、一方で、『論註』には対応箇所が見られない『大智度論』の引用が一〇回見られることにも注意したい。また『論註』と同箇所を引く場合でも、『論註』とは異なる文脈で用いられている例もまま見られる。これらから、少なくとも『論註』の引き写しでは『略論』は成立せず、『略論』の選者には『大智度論』に十分に精通し、また般若空の思想を説く他の大乗経論にも広く通じている者が考えられねばならない。

四、『論註』との比較についてなお付言すれば、『論註』は般若空の思想を背景としつつも、『浄土論』の註釈書として、基本的に浄土教の枠内での思想を説いている。それゆえ、『大智度論』の引用も、本稿の（2）（3）（5）（8）（10）（15）に見られるように、ほとんどが浄土教的な枠組みに納めて受容されている。これに比して『略論』の仏智疑惑論は、先述のごとく通仏教的内容を中心としており、『大智度論』の引用についても、『大智度論』でなされている議論が、そのまま同様の文脈で再現されている傾向が見られる（ただし、例えば五種不思議説の引用に見られるように、必ずしも『大智度論』の原意どおりに引いているものばかりというわけではない）。

五、『略論』の出典の一つとして、真諦訳『大乗起信論』の可能性を指摘した。本論で述べたように、『大乗起信論』は曇鸞没後まもなくの五五〇年の訳出とされるから、『略論』の撰者を考える上に疎かにできない問題を含む。今後の課題である。

**註**

（1）『安楽集』の文を『略論』が引いた可能性については、毛利憲明「略論作者の研究（三）」（『真宗研究』一六、真宗学研究所、一九二八年）に否定されている。

（2）近年の詳細な研究に田中真「『略論安楽浄土義』の研究―燉煌出土本の書誌学的考察―」（『宗学院論集』七〇、一九九八年）、同「『略論安楽浄土義』のテキストをめぐって」（『浄土真宗教学研究所報プラサーダ』八、一九九八年）がある。

（3）『略論』の撰述問題を思想的な面から検討した研究に、八木昊恵「『略論安楽浄土義』研究崖略」（『宗学院論輯』三五、一九四二年）、岡亮二「『略論安楽浄土義』の一考察―十念思想を中心として―」（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』五、一九六六年）、同「『略論安楽浄土義』の一考察―曇鸞撰述説をめぐりて―」（『宗学院論輯』三八、一九六七年）、大田利生「略論安楽浄土義の一考察」（『真宗学』一〇九・一一〇合併号、二〇〇四年）等がある。大田氏は「曇鸞の思想と必らずしも一致しない点もあり、曇鸞撰述だと断定するにはいまだ十分とはいえないように思われる。むしろ、疑わしいといった方がいいようにもいえる」との慎重な見方を提示されている。

（4）『略論』の出典研究については、幡谷明『曇鸞教学の研究―親鸞教学の思想的基盤―』（同朋舎、一九八九年）六一頁に、引用書名目録が掲載されている。しかし書名と引用回数を載せるのみで、具体的に『略論』のいずれの文の出典であるかを明らかにされていないのが、惜しまれる点である。また、例えば『雑宝蔵経』を出典に数えるなど（詳細は後述）、講義録の説示に対する十分な検証がなされているか疑問な部分もある。『略論』の一々の文ごとの精査は、なお今後の課題として残されているように思われる。なお、『論註』の出典研究については、最近、武田龍精編『往生論註出典の研究』（永田文昌堂、二〇〇九年）が出版されている。本稿執筆においても参照させていただいた。

（5）名畑應順『略論安楽浄土義講案』（東本願寺出版部、一九六六年）一二二頁。これらのなか『大智度論』巻二七では、一切智と一切種智との相違を問い、「佛盡知二諸法總相別相一故。名爲二一切種智一。」（大正二五、二五九頁上）等と、諸法の総相を知るのが一切智で、これは声聞・辟支仏の智慧であり、諸法の総相・別相を知り尽すのが一切種智で、これが仏の智慧であると説かれている。

（6）誓鎧『略論安楽浄土義讃慧録』二巻（以下、誓鎧『讃慧録』）は、龍谷大学大宮図書館写字台文庫所蔵のものによる。本願寺派の学匠誓鎧により著された本書は、大谷派の学匠大含の『略論安楽浄土義講義』二巻（以下、大含『講

義』、真宗全書十一所収）と並び、「真宗において数少ない略論の講録として、東西の双璧」と評されるが（名畑氏先掲書、六一頁）、これまで翻刻されておらず、また筆者の調べた限り、龍谷大学の写字台文庫所蔵の一本しか所在が確認できない。本稿の出典調査においては、この誓鎧『讃慧録』と大含『講義』の講義録をよく参照した。

（7）吉迦夜・曇曜訳『雑宝蔵経』のなか、巻七にある「（八七）波斯匿王勧化乞索時有二貧人一以レ髭施レ王得レ生レ天縁」（大正四、四八二頁下）の話が近いようにも思われるが、この話では貧人は王から直接物を貰っておらず、『略論』の喩えの出典と見ることは難しい。

（8）『論註』における「不思議」「不可思議」の語の特徴については、藤丸智雄「曇鸞と僧肇―不思議の語をめぐって―」（『印度学仏教学研究』四四巻二号、一九九六年）参照。また藤堂恭俊「往生論註と大智度論」（『印度学仏教学研究』一三巻一号、一九六五年）では、『鳩摩羅什法師大義』に見える廬山慧遠の問いに対する鳩摩羅什の答え（大正四五、一三三頁中）のなかでも、五種不思議説の仏法不思議は『論註』巻上の用例と同じく阿羅漢の作仏を説く上に用いられていることが指摘されている。

（9）僧肇『注維摩詰経』に「法無有比無相待故　肇曰。諸法相待生。猶二長短比而形一也」（大正三八、三四六頁中）とあるのも、関連が窺われるが、この文自体が『大智度論』巻一二の文によるものと見られる。

（10）平川彰「如来蔵思想とはなにか」（同氏編『如来蔵と大乗起信論』所収、春秋社、一九九〇年）参照。『大乗起信論』の訳者、訳出年代については異説もあるが、平川氏は宇井伯寿氏の研究を支持されて、梁の太清四年（五五〇）に真諦三蔵により訳出されたとする『歴代三宝紀』等の説をとっておられる。

（11）『略論』の「覩智従二不覩一生」の語について、『大乗起信論』以外の文献が出典の可能性はないか、さらなる検証が必要だが、現在のところ不明である。『大乗起信論』のほうから辿っていく方向もある。ただし、古注釈書に基づいて『大乗起信論』の思想素材となった経論疏の文を列挙されている柏木弘雄『大乗起信論の研究』（春秋社、一九八一年、四九～五九頁）、思想背景に関する網羅的研究である高崎直道「『大乗起信論』の素材」（平川前掲書所収）を参照する限りでは、本稿に挙げた「依二不覩一故説有二始覩一」の文に関する指摘は見られない。

（12）他に、曇無讖訳『菩薩地持経』巻三にも次のようにある。

又一如来。能レ於二三千大千刹土一。悉能施二作一切佛事一。第二佛出無レ所二利益一。（大正三〇、九〇二頁中）

（13）『論註』巻上「問曰。若言下無礙光如来…」（真聖全一、二八三頁）。出典については武田氏前掲書、七七頁参照。

(14)『論註』巻上に「茫茫蒼海爲二絶目之川一」（真聖全一、二九一頁）とある「川」についても、「海」を表す同様の用例かとも思われるが、定かではない。

(15) 本稿に挙げた（1）～(16) のうち、（1）（4）(11) を除く全てについて『大智度論』を出典に数えた。ただし（2）は二回（劣夫従王の喩、貧貢瑞物の喩）と数え、（8）も二回と数えたから合計一五回となる。

(16)『略論』第一問答「釈論言…」（真聖全一、三六七頁）、第八問答「如仏告…」（真聖全一、三七五頁）の二箇所。それぞれ『大智度論』巻三八（大正二五、三四〇頁上）、『大智度論』巻一八（大正二五、一九三頁上）からの引用である。

(17) 本稿の（2）（3）（5）（8）(10) (15) の六箇所、ならびに前註に挙げる第一問答中の引用の合計七箇所。